

体育会の歴史

（文武両道の125年）

慶應義塾体育会は2017年に創立125年を迎え、4月23日に日吉記念館において記念式典が開かれる予定である。ルーツ校といわれるラグビー、ホッケーをはじめ、早くから西洋のスポーツを取り入れてきた義塾の体育会は、わが国の学生スポーツ草創期から華やかな歴史を刻んできた。

柔術・剣術・野球・端艇など 7つの運動部で体育会発足

「（西洋の学校では）四肢を運動し、苦学の鬱閉を散じ身体を健康を保つ」と『西洋事情』で紹介し、『福翁自伝』では「まず獣身を成してのちに人心を養う」と説いているように、



福澤と剣道部員（1900年）

福澤諭吉は教育における体育の重要性をいち早く認識していた。後期新銭座時代（1868〜71年）には規則の中で「ジムナスチックの法」を定めて西洋流の体育思想を取り入れ、三田移転後には各運動部が作られるようになる。これらの運動部を

組織的に統一するため、柔術（現柔道）・剣術（現剣道）・野球・端艇・弓術・操練・徒歩の7部により慶應義塾体育会が創設されたのは1892（明治25）年5月である（操練・徒歩はその後廃止）。

ところで義塾が日本に初めて紹介し、その普及と発展に努めたルーツ校といべきスポーツに、ラグビー、ホッケーなどがある。ラグビーはケンブリッジ大学で選手経験がある英文学教員E・B・クラークが1899年に塾生に教えたことが始まりと言われており、1903年には蹴球部として体育会に加入した。ホッケーは1906年にアイルランド出身のグレイ牧師が塾生に指導し、ホッケークラブが創設された。体育会加入は1919（大正8）年である。

伝統の早慶戦の始まりは、1903年の野球の試合からだった。しかし、応援の異様な過熱で約20年間中断され、復活したのは1925年だった。春の隅田川の風物詩、早慶レ



第1回早慶野球戦出場選手



熊谷一弥君

ダブルスとともに銀メダルを獲得、日本人初のメダリストとなった。なお、同大会の陸上競技には塾生として初めて益田弘君も出場している。その後もロサンゼルス大会（193

ガッタの端艇部早慶戦は1905年からスタート。野球と同様に大勢の観客を集める蹴球部のラグビー早慶戦は、1922年から行われている。現在、多くの体育会運動部で早慶戦が行われ、熱戦を繰り広げている。

日本人初の五輪メダリストは塾員の熊谷一弥君

先日のオリンピックオデジャネイロ大会で塾員の山縣亮太君が陸上男子400mリレーで銀メダルを獲得したことは記憶に新しいが、日本人五輪メダリスト第1号は塾員だった。在学中から庭球部員として活躍していた熊谷一弥君は、1920年のアントワープ大会に出場、テニスのシングルス、ダブルスとともに

2年)、ベルリン大会(1936年)などではホッケー部、水泳部等の塾生の活躍もあった。団体としては1956(昭和31)年のメルボルン大会に、端艇部のエイトが工学部(現・理工学部)の協力による名艇「KEIO」号で参加している。

小泉信三「スポーツの三つの宝」と体育会の精神

第2次世界大戦は体育会にも多大な影響を与えた。1943年には10月に野球の「最後の早慶戦」が行われ、体育会活動は実質休止となった。また、戦災や米軍による日吉キャンパスの接収などにより、義塾は戦前の体育施設の約8割を失った。

体育会が復活したのは1946年6月。その年新たに加入したレスリング部、ボクシング部、アメリカンフットボール部の3部を含め23部での再開だった。その後、日吉に体育館やプールが整備され、部の増加とともに女子部員数の伸びも著しい。2016年6月のデータでは、部員2856名のうち、女子は715名を占める。現在の体育会所属運動部は43部を数える。またそれ以外にも

体育会準会員である医学部体育会が24部、理工学部体育会が17部で構成されている。

体育会を語る時、忘れてはならないのが、第7代塾長を務めた小泉信三である。塾生時代、テニス選手としても活躍した小泉は、1962年の体育会創立70年記念式典での講演で「スポーツが与える三つの宝」について語った。「練習の大切さ」「フェアプレイの精神」「良き友」である。日吉のテニスコート西斜面には、「練習ハ不可能ヲ可能ニス」の碑が残され、スポーツの三つの宝は体育会の精神として今も息づいている。



小泉信三元塾長



小泉信三記念碑